

# くじけないで

柴田トヨ  
詩集

## 朝はかならずやってくるー私の軌跡

なっています。

今、一人暮らしの私の家にはヘルパーさんが週六日、六十四歳になる一人息子の健一が週一日きてくれますが、正直に言えば、ヘルパーさんや倅が帰るときはさびしく、悲しくなります。とくに健一が帰る時間が近づくと気分が塞ぎ、無口になり、



私が詩を書くきっかけは、倅のすすめでした。腰を痛め、趣味の日本舞踊が踊れなくなり、気落ちしていた私をなぐさめるためでした。九十を過ぎていましたが、産経新聞の「朝の詩」に入選したときの感動が忘れられず、今にいたっています。詩はベッドで横になつてるときやテレビを見ているときなど夜に生まれます。出てきたテーマにそってエ



ンピツでメモ書きしておき毎週土曜、様子を見に来る息子に見せ、朗読しながら何度も書き直して、完成させます。だから一作品に一週間以上の制作時間がかかります。

私は娘の頃から読書や映画鑑賞、そして地元出身の作曲家、船村徹さんの歌謡曲が好きでした。とくに船村徹さんが作曲した「別れの一本杉」の作詞家ですが、二十六歳の若さで亡くなった高野公男さんの詩には感動して「こんな詩が書けたらいいな」と思っていました。そうして詩作でわかったことは、人生、辛くて悲しいことばかりではないということでした。

私を考えると、結構、頭を使い、忙しいんです。だからどんなにひとりぼっちでさびしくても考えるようにしています。「人生、いつだってこれから。だれにも朝はかならずやってくる」って。

一人暮らし二十年。私しつかり生きてます。



柴田トヨ 詩集  
「くじけないで」より 抜粋  
絵 O・J